

契丹文字解読の可能性

『長田夏樹論述集（下）』第8章

（原載：『神戸外大論叢』第2巻第4号，1951年12月）

この論文は、①まえがき、②文献に記されたいわゆる契丹文字、③契丹語の帰属、④漢字表記の契丹語彙、⑤契丹大小字、⑥慶陵哀冊の契丹文字、⑦哀冊に使用された契丹小字の組成、⑧元字の出現頻度表、【⑨契丹元字総表】（新版で削除）、からなる。

①②③④では先ずこれまでの契丹語研究を紹介する。次いで史書所載の漢字表記契丹語38例につき検討し、契丹語はダフル語（達斡爾語）・モンゴル語（土語）、特に後者に近似するとした。孫伯君・聶鴻音『契丹語研究』（中国社会科学出版社，2008）によると中国の契丹語研究者の間では契丹語をダフル語の古形と見なす向きにあるという。なお、ダフル語説は白鳥庫吉「東胡民族考」（『史学雑誌』21-24, 1910-1913）にみえる。

⑤は契丹大小字の区別の問題である。50年代に入っても大小字の区別は混乱していたが、長田氏は、大字は漢字を改めて作った表意文字的なもので『燕北録』所載の文字がそれにあたり、小字は表音的要素の多い文字で慶陵哀冊の文字がそれであると正鵠を得た認識を示す。これは羽田亨「契丹文字の新資料」（『史林』10/1, 1925）と同様の見方である。

⑥は村山七郎「契丹文字解読の方法」（『言語研究』17/18, 1951.3）の突厥文字依拠説を以下の三点より批判する。一、史書所載の契丹語は蒙古文語と明確に異なる特徴を示しているが村山1951によって解読されたとする契丹語はあまりにも蒙古文語的である。二、約40字の突厥文字と200字に余る契丹文字構成要素を比較したため音価の同じ文字が何らの条件も伴わずに異なった幾つかの形で現われるという結論となった。三、左から右としか読み得ない文字を右から左に読んだ。この批判によって、契丹小字の字形が突厥文字に拠るとする説は成立の根拠を失った。もっとも近年に至って吳英喆「契丹小字中的“元音附加法”」（『民族語文』2007/4）より、契丹小字は母音の表記法において突厥文字の影響を受けているとの説が出されている。

⑦では長田氏自身の解読の方法を提示する。哀冊より327個の文字成分（長田氏は“元字”とする。この用語は早くは白鳥庫吉「契丹女真西夏文字考」（『史学雑誌』9/11・12, 1898）に見える）を抽出し“契丹元字総表”として提示するわけであるが、管見による限りこれは契丹文字研究史上初めての試みである。次いで、組み合わせ文字（長田氏は“詞字”とする）となった場合の元字の配列順を確認し、さらには詞字中の位置による元字（楷書と行書と草書の同定を経たもの）の出現頻度に着目し統計をとった。この三つは未解読の表音文字を解読するうえでの基礎的な研究であり、当時使用できた資料は限られていたため

元字表は十全なものではなかったとはいえ、解読を確かな軌道に乗せたという意味で、長田 1951 は一つの解読の山を越えたといえよう。これで準備は整い、あとは元字の音価を定める仕事が残った。二つ目の山である元字の音価の推定は、契丹文字研究小組「關於契丹小字研究」(『内蒙古大学学报』1977/4, 契丹小字研究專号) でなされ、清格爾泰・劉鳳翥等『契丹小字研究』(中国社会科学出版社, 1985) に結実した。なお、⑨契丹元字総表は新版では削除されている。この表は研究史上重要な意義を持つものであり残念である。

(吉池孝一)